



ホット・インド、クール・ジャパン

対談： サンジーヴ・スィンハ氏、岡本 和久

サンジーヴ・スィンハ氏略歴

インド工科大学(IIT)卒業。1996年人工知能の研究開発のため来日。その後ゴールドマン・サックス証券、みずほ証券、UBS証券を経て、2008年、サン&サンズグループ設立。現在GMR都市インフラ、TATAアセット・マネジメント、TATAリアルティ・アンド・インフラ日本代表、在日インド商工会議所金融業の担当知事、グローバル・アソシエーション・オブ・リスク・プロフェッショナルズ日本代表、インド工科大学同窓会日本代表、丸の内インド・エコノミック・ゾーン共同創設者、国際大学非常勤講師、京都大学顧問、北陸先端科学技術大学院大学学長顧問、日経新聞コラムニスト、ジャパンスポットライト編集委員兼任。

テレビ東京「カンブリア宮殿」、NHK、テレビ東京WBS、フジテレビなどに出演、日経新聞、日刊工業新聞、読売新聞、週刊ダイヤモンド、週刊東洋経済、ジャパン・タイムズ、一橋ビジネスレビュー・マネジメント・フォーラム、経済同友会、経団連、商工会議所などにて講演を行う傍ら、インタビューや記事への寄稿・掲載を行う。

岡本 | この10年ぐらいでインドは非常に大きく変化をしましたよね。まずその原動力はどの辺にあったのか。そしてモディさんの新政権のもとで、これからどのようなことが起こっていくのか、その辺からお話を頂けますか

スィンハ | 私はインドから日本に来てすでに18年になりますが、今、インドに行っていちばん強く感じるのは、みんな携帯やスマホで話をしていることです。インドではFacebookよりもWhatsAppが大変な人気です。Facebookと同じSNSで、日本ではあまり知られていないのですが、インドでは大変な人気です。

岡本 | LINEのようなものですか？

スィンハ | LINEのように電話はできません。簡単なテキストング、文章を送れるだけです。ただ、グループを作ることが非常に簡単で、そこがインド人に非常にうけています。色々な種類のグループを簡単に作ることができます。つまり、みんながケータイやスマホを持って



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

コミュニケーションをしているということです。インドは道路を始めとしてその他インフラの問題もあり、なかなかモノが動かない国です。渋滞は著しい。まだ車も電車も足りないし、インフラの不足には大変困っています。しかし、モノは動かない国ですが情報が動く国なのです。情報の動きはインドでもどんどん進化をしています。ケータイは最近では誰でも持っています。インドはまだ貧しい国ですが、いきなりがインターネットなどを見ることができるよう。それはすごく大きい影響を及ぼしています。日本では当然のことでしょうが、インドでは一人当たり GDP は日本の 10 分の 1 以下です。そのような貧しい国でもインターネットの使い方は先進国並みです。そこがインドのいちばんエネルギーになっている元ではないかと思えます。

岡本 | そのように大きく変化をしていった背景としては、やはり教育ということがあるのでしょうか？

スインハ | この点も日本とは比較になりませんが、インドでは識字率が非常に大きく向上しました。だいたい 10 年に 10% ぐらいずつ識字率が改善しています。今 74% ぐらいです。20 年前は 50% ぐらいでした。50% といっても本当に名前を書ける位のレベルだったのです。以前は自分の名前をかける程度の人でも識字率の計算に入れていたようですが、今はきちんと読み書きできる人が 7 割以上になってきています。誰でもケータイを持ち、テキストで文章を送り合っていれば、文字に触れるチャンスはすべての人にとって多くなってきているのです。貧しい人でもあまり教育を受けていない人でも、最近では文字を読めるようになってきている。



岡本 | 文字が目に触れるチャンスが増えてきている。つまり文字が身近になってきているということですね。

スインハ | そうです。以前はギリギリ小学校の 1~2 年生だけ行って、それで名前だけは書けるようになった人が字を読めると言われていたのですが、最近では識字率が向上しただけでなく文字を使う頻度も増えてきています。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | 識字率という場合の言葉は何語ですか？ヒンズー語ですか。

スィンハ | それぞれの地域の現地の言葉です。ご存知のように、インドは地域ごとに言葉が皆違います。文法もそれぞれ違いますし、また文字もそれぞれの地方で異なっています。

岡本 | 言葉が違うという事は、人種もそれぞれの地域でかなり違うと言うことでしょうか？

スィンハ | 人種も違います。南インドにはドラヴィダ系が多かったり、北インドの方はアーリア系が多かったり、東に行くと、いわゆるヒンドスタニ系、もっと東に行くと、モンゴル系もいます。

岡本 | 教育に力を入れたのはやはりインディラ・ガンディーさんの頃からですか？

スィンハ | そうですね。私の母親が学校の先生になったのも、ちょうどその頃です。その頃の学校はとても面白かったです。町から 25 km ぐらい離れたところにあった町です。まあ、小さな村ですから、隣の、そのまた隣の町ぐらいの感じです。その村に初めて出来た学校でした。といっても建物は 1 つの部屋だけ。それ以外何もありません。トイレもありませんでした。ただ 1 つの部屋があるだけでした。

岡本 | 校庭はあったのですか。

スィンハ | とにかく周りには何もないのでいわば砂漠の真ん中に建物が 1 つあるだけです。比較的硬い砂でできた砂漠地帯でした。地平線まで何も無い。そういう意味では校庭は大きかったですね(笑)。所々に小さな家がある。それも泥でできた家でした。牛はお金持ちしか持てなかったの、その辺の人が持っていたのは山羊でした。そのようなところに 1 つの部屋だけの学校ができた。それも石でできていました。その当時は石できているということが贅沢だと思われていました。

岡本 | お母さんはどうして先生になろうと思ったのですか？

スィンハ | 母はあの時代としては大変珍しいのですが、大学を卒業していたのです。その意味では本格的な教育を受けていたのです。父は大学には入っていませんでした。

岡本 | お母さんのご両親があまり教育熱心だったということですか？

スィンハ | そうですね。母の父が、もし勉強したいのであれば大学に行ってもいいと言ったようです。



長期投資仲間通信「インベストラيف」

大学に行きなさいと言うのではなく、行ってもいいと言ったのです。行きたいのであれば反対はしないよ、ということだったのです。

岡本 | でも大学に行くというのはかなりお金もかかったのではないのでしょうか。

スィンハ | ありがたいことに、インドは教育費が安かったのです。まあ、社会主義的な社会だったということです。ほとんど国立か州立の大学でした。学費はかなり安く中間層の人であればそれほどの負担もなく大学に行くことができたのです。

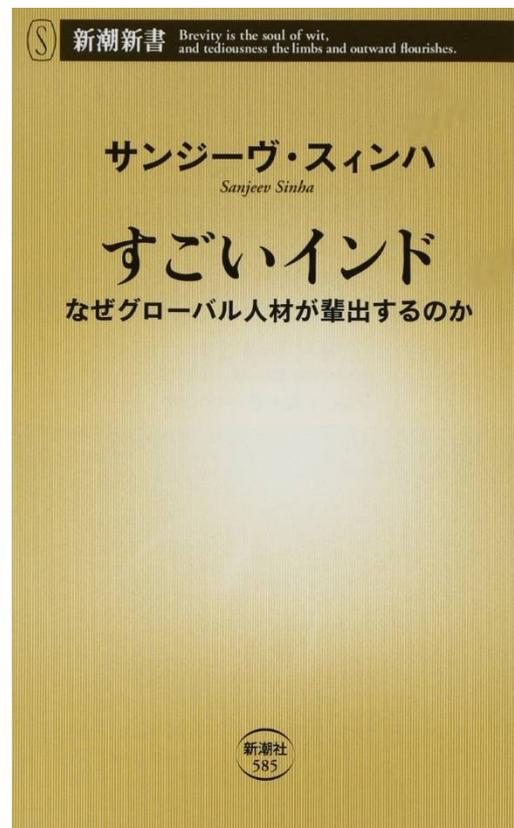
岡本 | そんなに良い条件だったのに、多くの人が大学に行かなかったというのは、やはり家の仕事を助けて、働かなければならないという事情があったのでしょうか。

スィンハ | それが大きいです。母が教えだした学校も、たった1部屋、先生も1人、すべての教科を1人で教えていました。数学も国語も歴史も全てです。しかも1年生から5年生まで、小学校5年制なので、全校生徒を1人で全教科教えていたのです。しかも色々な年齢の子供たちが集まっていたいました。

岡本 | それは大変だ。

スィンハ | ですから私が思うのは、勉強そのものをすると言うより、ポイントはみんな毎日、一定のところに集まる。時間通りするべきことをする、そのようなセンス・オブ・オーガニゼーション、つまり、規律立った生活をするというところに意味があったのではないかと思います。きりつた規則正しいライフスタイルと言うのでしょうか。それまでは全くそのような規律がなかったのです。毎日、フラフラして生活をしていました。時間も決まっていなくて、ルーティーンの仕事もない。雨だったらこれをする、今日は暑いからこれをする。その程度のことでした。時々、山羊の世話をします。まあ、あと水を運んでくること。これは結構大きな仕事でした。遠い所から運んできますからね。

岡本 | 山羊はミルクを絞るための目的ですか？





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

スインハ| はい。

岡本 | それではミルクをとって、それをどこかの町に持って行って売るといようなことでしょうか？

スインハ| 村の中ではほとんどバーター経済、物々交換が中心でした。山羊のミルクとスイカや野菜を取り替えると言ふようなね。あと小麦粉とか蕎麦がとれました。つまり生活全てがほとんどきちんとしておらず、その日暮らしたのです。そこに1つだけ学校ができた。それはとても大きな刺激でした。毎日、時間通り行く場所が決まっている。違う町から来ている先生がそこにいる。最初はみんな先生のことをこの人は一体、何なんだろう、他所の町からやってきて、そして給料をもらっている。そのような目で見ていました。しかも字が読める。村にはそのような人は1人もいなかったのです。

岡本 | それが1980年ぐらいだったということですね。

スインハ| そうです。

岡本 | 日本では江戸時代に寺子屋がたくさんありました。ある程度、文字を読んだり、書いたりでき、算数もわかるような人が子供たちを集めて「読み、書き、そろばん」を教えていたのです。今お話を伺っていると、インドでは1980年頃から少しずつそのような寺子屋のような形での教育が浸透し始めたと言えるような気がします。

スインハ| そういうことですね。日本と比べてインドの問題は継続性がなかったということです。かつてはイスラム教のムガル帝国の支配下にありました。昔々、インドにはヴェーダ哲学があり、その当時は、子供たちの教育も盛んでした。それがイスラム帝国の支配下に入り、その文化が断絶してしまいました。イスラムの考え方では必ずしも教育に熱心ではありませんでした。教育よりも宗教という考え方です。特に女性に対しては、教育を受けるべきではないという考え方もありました。それが200年ぐらい続いたのです。女性は教育を受けてはいけない、外に出てはいけないという考え方がその間続いていました。18世紀、19世紀頃ですね。

岡本| その後、イギリスの植民地になったのです。

スインハ| これについては、まあ良い点も悪い点もありました。良い点としては、女性に対する差別化が少なくなってきたことがあげられます。しかし一方で、インド国内の文化などは軽視されました。庶民が教育に無関心だったこともあり、インドの識字率はどんどん低下をして5%にまで下がってしまいました。このように、インドの場合、一貫して長い時間をかけ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

て教育を普及させていこうという継続性がなかったというのは非常に不幸なことでした。イギリスの支配下ではイギリス人に近い人が権力もお金も持つ。でもイギリス人に関係がない人は極めて貧しい。社会的な基礎的なシステムもない非常にプリミティブな国だったのです。さらに、植民地のやり方としては貿易も非常に不自然なことが多かった。賄賂など、極めて大きな問題がたくさんありました。社会的なシステムは全て崩壊してしまった。その結果として、日本の寺子屋のように長い期間をかけて継続していけるシステムがなくなってしまったのです。明治時代には日本の識字率は 100%に近かったと聞いています。そのような基盤が全てなくなってしまった。1980 年ごろから再度それを作り直す作業が始まったのです。

岡本 | 1980 年頃から再びスタートした教育の改革が 30 数年をたつて今、少しずつ実がなり始めていると言えますよね。本当に教育は長期投資ですね

スィンハ | そのリターンが今出始めていると言えます。80 年代から学校に行き始めた子供たちが今、30 代 40 代となり、社会の中で中心となって働いています。日本と違ってインドは平均寿命が短いです。ですから、インドの労働人口のピークは 40 代ぐらいなのです。インド人の 30 代は日本人の 40 代ぐらいの感じでしょうか。

岡本 | スィンハさんの本の中にも述べられていますが、教育水準が高まるのと一緒に、英語を使えるかどうかというのが社会的に非常に重要になってきていますよね。英語ができるのと、できないのとではその後の人生が、デバイトされる。まあ、日本でもそういうところありますけどね。

スィンハ | 英語が役に立つ環境にあれば英語力は大きな差を生み出します。しかし、田舎の村に住んでいる人にとっては英語を使えるようになる意味があまりありません。英語を使う機会もないし、英語が通じる環境と全く分離していますからね。しかし、人口 10 万人以上の中規模の都市になると、最近では小さな外国企業が存在するようになってきています。インターネットカフェがあつたりして英語を知っていることが役に立つような環境が少しずつ出始めてきています。そのような町に人々は集まってきて少しずつ都市化が進み始めています。そのような環境になってくると、英語ができるか、できないかが大きな違いを持つようになってきています。オポチュニティ(機会)の違いは大きいのです。IT 産業の一番低レベルの仕事であっても、その給料はインドの平均賃金よりも高いのです。ですから、IT 産業に関われるだけでも、それはとても恵まれていることなのです。直接 IT の仕事をしていなくても、IT 会社で働けば大きな違いが出てきます。

岡本 | よく言われることですが、IT 産業というのは、インドのカースト制度の中で定められた職業ではありません。ですから、ある程度、知識やる気を持った人であればそのような会



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

社で活躍することができる。IT 産業以外でそのような産業はあるのですか。

スインハ | そうですね。IT 産業以外ではあまりありません。今は禁止をされていますが、地方に行くほど、カースト制度は根強く残っています。飲食店に入る時も、店主とお客が同じカーストでないと入らない。その飲食店でも掃除をしている人はもっと低いカーストの人ということになります。鍋を作る人はまた別のカースト、家具を作る人はまた別のカースト、というように、伝統的な職業であるほどカーストと強くつながっています。

岡本 | そこにまだ古いインドが残っているということですね。でも法律的にはカースト制度はすでに廃止されているのでしょうか。

スインハ | そうです。ですから、先ほど例に挙げた飲食店もだんだん事業規模が拡大してくるとカースト制度は認められなくなってきます。まして上場でもするようなことになれば、ディスクロージャーやコンプライアンスの対象ともなります。ガバナンスの問題ですね。例えば新聞に求人広告を出すときもカーストについて書いてはいけない。つまり、大きくなるほど法律的にカーストは認められなくなってくる。一方、IT 産業のようにもともとカーストに関係のない産業が裾野を広げている。誰でも能力があれば入れる産業です。

岡本 | インドの人ってどうして IT が得意なんでしょう。

スインハ | 数学はみんな好きですね。数学で遊ぶことが好きなのです。ある程度教育を受けている人の場合ですね。クイズのように数学の問題を出して、みんなで競争して、それを解く。友達同士で集まって数学の問題で盛り上がったりします。それは昔からです。例えば私と私の兄と兄の友達と母親が集まってみんなで数学の問題の話をしたりします。数学で遊ぶことが好きなのです。

岡本 | それは日本の江戸時代と非常に似ています。江戸の市民は数学や図形の問題などを競って解いたりしていました。和算と言って非常に高度な数学の知識を持っていたと言われます。もしかしたら、インドの文化が日本にまで影響をしていたのかも知れませんね。庶民まで数学の問題を出し合ってクイズ感覚でそれを解き楽しんでいたようです。

スインハ | それはとても面白いですね。インド人は数学とともに哲学も非常に好きです。インドの伝統的な話の中でも、数学や哲学を学んで大変出世をしたというような人がたくさんいます。インド人は自分の頭が良い事を非常に大事にする国民です。そしてそれを見せびらかしたがるのです。そのような文化があります。

岡本 | スインハさんの本にも出ていましたが、インド人は何かを持っていると、それを人に見せ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

たいという傾向があるようですね。知識があつたらそれを人に見せたい、お金を持っていたら、それを見せびらかしたい、そういう文化があると本に書いてありましたね。

スインハ | そうです。それは非常に強いです。

岡本 | IT の分野からインドの成長がスタートしているのですが、今、モディさんがやろうとしている政策はどのようなものになるのでしょうか。

スインハ | IT 分野は重要なのは、これからも変わらないでしょう。少し頑張れば誰でも IT の仕事はできるようになっていて、米国企業などからのビジネス・プロセス・アウトソーシングはこれからも成長していくと思います。これが結構、地方にまで浸透してきています。これはインドの成長力の源泉のひとつだといえます。逆に言えば国は何もしなくても発展をしていく段階に入ってきていると思います。1984 年にはラジーヴ・ガンディー首相の政権は単独過半数をもっていました。その後ずっとそのような政党はなかったのですが、今回、モディ政権は単独過半数をとったのです。ラジーヴ・ガンディーのマニフェストというかスローガンだったのは、IT とテレコムでした。そのおかげで、IT は大きく成長をしました。バンガロールの成長が象徴的です。つい、最近、火星にまでロケットを打ち上げられるようになったのです。非常にメトロポリタンな町になりました。今では日本人も多く住んでいます。しかし、ロケットを火星にまで打ち上げても、IT 産業が成長しても、IBM の幹部になっても、例えば道路は大きな問題です。モディさんが一番注目をしているのがここです。インフラ投資です。これが彼の最大のスローガンです。港湾設備、道路、空港それらのインフラを整備していく。インフラがなければ成長が持続しません。工業団地なども必要だと思います。

岡本 | インフラを整備すると言う時、大体どれくらいのタイムスパンで考えているのですか。

スインハ | インドは普通 5 年計画で考えます。それがちょうど首相の任期にもなっています。長期目標は 5 年間、プロジェクトによっては、1 年 2 年ということもあります。当然、予算などの問題もあります。毎年 1 万 km の道路を作るという計画がずっとあるのですが、なかなかそれが実現されていません。毎年、毎年、遅れています。今、インドの問題は内需が大きいことです。インドの面白い面ですが、20 年前には有料高速道路は考えられませんでした。道路は只というのが常識でした。今は全くそ





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

れが変わっています。お金を払っても早く着きたい。時間の価値を皆分かってきたのです。それも携帯やスマホのおかげかもしれません。話はできるけれども行けない、それでみんなイライラする。なぜなら、道路が渋滞をしている。今は皆お金を払ってでも道路を良くして欲しいと思っている。その点では有料道路の需要は非常に高いものがあると思っています。

岡本 | どんなに成功して大金持ちになり高級車に乗っても道路が混んでいたらどうにもならない。

スインハ | 投資をしようという意思もあります。しかし、現実には政治的な問題、土地取得の問題、宗教的な問題など数多くの問題があるのも現実です。例えば、道路を作ろうとするところに、木が1本立っている。そこに小さな仏像を置きお寺にしてしまう。そうすると、それを壊す事はできない。それが道路の真ん中にあっても壊すことができない。個人の地権の問題、伝統の問題、環境の問題、数多くの問題があります。インド人の不得意な点はあまりきちんとした計画を立てないことです。とりあえずなんとかやりたい。早めに何かをやりたい。きちんとした長期的な計画を立てるのに弱い。そこが問題です。視野が短期的です。さらに最近では経済のスピードが速いからです、視野がますます短くなってきています。大きなプロジェクトになるほど長期的な視野が必要です。しかし、そのような視野がないので毎回、毎回、失敗の繰り返しになってしまう。都市計画は少なくとも10年の視野が必要です。本当は50年ぐらいの計画が必要です。それを2、3年でやろうとする。それで失敗してまたやろうとする。そしてまた失敗をする。毎回、毎回、その繰り返しです。これがインドのインフラ開発の大きな問題です。

岡本 | どうしてみんな、そんなに短期志向になるんでしょうね。インドだけの問題ではありませんが。

スインハ | みんな、すぐにお金持ちになりたいですからね。事実、そのような人も現れてきている。成功事例が見えているのです。政治家も、官僚も実業家もみんな、そういう考えです。「金持ちになる」というのが目的ですから汚職の問題も出てくる。「巨大プロジェクトだから私も少しは賄賂をもらえるかも知れない」と思ってみんな集まってくる。だからきちんと計画を立てて実行していくという長期的視野がない。日本の強みである信念と忍耐が本当は必要なのです。

岡本 | 本にも出ていましたよね、日本企業が10年先を目指して事業を展開すると言ったら誰も興味を示さなかったというような話が。

スインハ | なんでも早く、早くです。私のところにも「来週、日本に行きたいからアポを取ってくれ」というような依頼が多いのです。私も最初は頑張っていたのですが、最近は「それは無理



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

です。どうぞ自分でやってください」と断るようにしています。自分でやってみるとできない。そして2~3か月経つとまた私のところにまた戻ってくるんですよ。少しみんな落ち着いてきて、それでも日本でアポを取りたいというのであれば私も対応するのです。「モディ首相が日本に行ったのだから、あれもやろう、これもやろう」と思い付きでいろいろ言うてくるのです。でも、本気ではない。きちんと考えていない。知恵もない、組織もない、計画もない、経験もない、それが私にはわかるから対応するまでに時間を空けるのです。

岡本 | まあ、それはそれでチャレンジ精神というか、ステップアップしたいというスピリットが強いとも言えますよね。チャンスもある。

スインハ | 問題は目的がお金だけだということです。しかも、すぐに儲けたい。

岡本 | それはだんだん学んでいくのでしょうか。ちゃんとした組織がなければ持続的な事業はできない。宝くじを当てるような感覚では事業はできないということがね。構造的にお金が入ってくるビジネスが必要だということにいずれ気付くでしょう。

スインハ | そうですね。きちんとした組織をつかってビジネスをした人が結局生き残る。

岡本 | 日本では何百年も続いている会社がいくつもある。何百年という視点で企業というものを考えると自然に自分だけパッと儲けようという発想ではいけないことが分かる。江戸時代の初期に権力に結びついて豪商になった商人たちが没落して行くのを見て、まともな商人はどうしたら持続性のある、サステナブルな商売ができるかを考えるようになった。そして、近江商人の三方よし、「売り手よし、買い手よし、世間よし」というような考えができてきた。そしてビジネスが自分の代だけで終わるものではなく、代々続いていくものだという考えが浸透した。日本は非常に幸運でした。なぜなら江戸時代と言う260年も続いた平和な時代があったからです。その間、外国から責められることもなかった。日本国内だけで、基本的には自給自足の経済が成り立っていた。

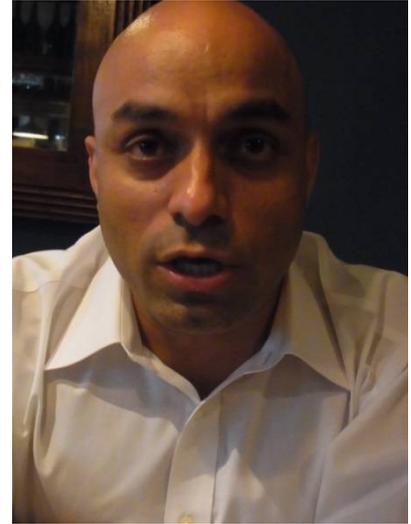
スインハ | それは非常に大きいですね。

岡本 | 日本は島国だから、その中だけでコンプリートしてればよかった。まあ、非常に幸運だったと思います。太平洋戦争中に日本はアメリカの爆撃は受けたけれども、その前は蒙古が来襲してきたことぐらいで、外国攻められる恐怖は非常に少なかった。その蒙古も二回襲来したけれど、二回とも台風で日本が守られた。その結果、何か日本はあまり根拠のない楽観主義は生まれるようになった気もしますけれどね。スインハさんは日本でもう18年でしょう。長い間、日本に住んで日本人の良いところと、悪いところはどんなところだと思いますか。強みと弱みと言っても良いかもしれませんが。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

スインハ | いいところは日本人には忍耐と信念があるということです。こ、それが非常に強い国ですね。その信念の理由は、人々がお互いに依存し合っているところから来ているのかもしれませんが。システムがすごくよくできていますから、個人的に自分のすべきこと以外、あまり心配をしないで安心していられる。自分がやるべきことだけをやればあと何も気にしないで良い。経済的にも何とかなるし、保険とか医療など心配することは無い。犯罪も少ないですからね。弱い点としては、日本人はあまり自分で判断をしないことでしょう。自分で判断をしないで自分の所属する組織に判断を任せる。自分で判断をすることは無い。第二次世界大戦の時も同じことが起きたのかもしれませんが。組織に言われた事は何でもやった。それが良い事でも悪い事でもやった。



岡本 | それは今でも続いていますよね。会社が違法行為をしたとしても、それが会社の命令であれば仕方がないということで、言うことを聞いてしまう。

スインハ | 日本は組織でしかなかかなか動かない国です。それがグローバル化した世界の中で日本の弱みになっています。大きな変動の中で早い対応がなかなか取れない。言い換えれば、個人的なリーダーシップがない。ダイナミズムがないのです。ダイナミズムは大きい組織からはなかなか生まれません。

岡本 | リスク・テイキングではなくてリスク・シェアリングになってしまっている。失敗するときは、みんなが失敗するので安心感がある。それはありますよね。インドと日本で似ている、というのはどんなところがありますか。違うところはたくさんありますけれどね。似てるところはどんなところでしょう(笑)。

スインハ | 一番似ているのは宗教観かもしれません。ヒンズー教と神道は非常に似ていると思います。

岡本 | そうかもしれませんね。両方とも多神教だし。

スインハ | その似た宗教観というのは、環境問題などへの取り組みにも表れているように思います。環境を大事にするという考えは多神教からきていると言えます。日本もインドも川を崇拝します。そのような考え方を、これからインドの企業活動にどのように生かしていくかとい



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

うのが重要なポイントだと思います。今は、インドは経済のことで夢中になっているので、環境のことをほとんど考えていません。しかし、一人一人の個人は自然を崇拝するという気持ちを持っている。それが企業活動にどのように生かされていくかと言うのは今後の課題です。

岡本 | 人間は皆自然の中で生かされている。生存させてもらっている。そういう中で「おかげさま」というような自然に対する感謝の心が生まれてくる。そのような基本的な考え方はインドではアマルティア・センの考え方などにも生かされているように思います。日本の江戸時代にもたくさんの経済学者はいましたが、彼らは皆、やはり社会との共生そして自然との共生などを大切なこととして考えていたように思います。何かただただ強欲に支配された資本主義では無い新しい資本主義の基本的な考え方はアジアから生まれてきても良いのではないかなあとと思います。

スインハ | 日本のこれまでの成功は、ある意味、そのようなアジア的な資本主義の考え方によってもたらされたかもしれないと私は思っています。アメリカとは違うキャピタリズムですね。少し社会主義的な考え方も混ざっている。アメリカは、自分は自国にしながらお金を海外にだし、それで儲かればいいと思っている。日本の場合には、やはり自分の手でモノを作るところに非常にこだわりがある。自分が直接関わってモノを作り、その結果として収益を得るということを大切にしている。そして自分の作ったものを買ってくれる人のところまで意識が届いる。しかも、自分のやるべきことさえきちんとすれば後は心配しないでもいい。他の人がきちんと自分の責任を果たしてくれている。本当に日本は安心できる国になっています。日本は焦る必要はありません。自分の持っている力をしっかり守っていればいい。ただ単にアメリカナイズされていけばいいと言うのではない。それをしていたら日本はダメになります。人間は焦ると自分の強みが見えなくなります。だから日本は焦らずに自分の強みをしっかりと守っていればいい。すべてを捨てて、何か新しいものをやろうとすると、せっかく持っている強みまで捨ててしまうことになります。それを注意して避けなければいけない。自分の強みの中から新しいものを生み出すことが必要なのです。自信を持ってそれで自分のやるべきことをちゃんとするのが大事です。日本の忍耐と信念に対する意識が少し弱くなっているのかなと思います。

岡本 | 最近は海外でクール・ジャパンなどと言われて日本的なものに興味を持つ人が増えています。クール・ジャパンっていったい何なのでしょうね。

スインハ | (笑)英語でのクールというのは忍耐力があり、焦らないという意味でもあります。私はむしろ日本にある良いものを信念と忍耐力を持って失わないようにしつつ、それらを生かして現代的なものを生み出している。それが評価されているのではないかと思います。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | なるほど、なるほど、自信を持って焦らないということですね。

スインハ | ですから、焦らないということが大事。ゆったりと穏やかで静かで、しかし、力強い。それが本当の意味のクール・ジャパンではないかと思います。日本の伝統的な知恵とか、そこを大事にしながらか、それを生かしていく。日本が変化するという場合、外面的な変化と内面的な変化をきちんと区別する必要があると思います。外面的な変化は必要だと思います。例えば、海外との接し方などです。その点はかなり変えなければいけない。英語の問題もありますしね。でも奥にある力を守りながら、外面的な変化を起こしていくことが大事なのです。70年代の日本などを見ていると、それが非常に上手にできていたように感じます。

岡本 | 70年代は日本にとっては試練の時代でした。ニクソンショック以降、円高圧力が強まる中で、オイルショックが起こったり、貿易摩擦が激化したりしました。その中でどのようにしたら日本は生き延びていけるかということ在必死に考えたのだと思います。当然、その中で日本が持っている本質的な強みを生かすというような行動が、それほど意識をしなかったけれども生かされていたのかもしれない。残念ながら今の日本を見ると、そのような危機感は弱くなっているような気がします。少し前は大変な円高でしたが、財界は皆、政府に対して「円高を止めてくれ」と声を発するばかりで円高を事業の展開にどのように生かしていくかというような発想はやや少なかったように思います。その意味では、スインハさんも言うように、日本の信念と忍耐力は少し弱くなっていたのかもしれないね。これからのインドと日本の関係をどのように考えていますか。これはある意味、スインハさんのいちばん重要なテーマかもしれません。

スインハ | ビジネス的にはすごくわかりやすいです。日本の資本と技術をインドのために使う。同時に日本から見ると、日本の技術をうまく提供できる国はインドであると考えています。例えばエレクトロニクス。インドではエレクトロニクス製品の製造は、まだほとんどできていません。日本もまた海外との競争で非常に苦しんでいます。ですから、日本の技術と資本を使って、インドで現地生産をできればインドの市場にもうまく繋がりますし、日本のメーカーにとっても非常にメリットは大きいと思います。インフラストラクチャーなども日本が入って整備すればとてもいいと思います。資本の面でも日本の年金資金や個人の金融資産等膨大な金額があるわけでその一部がインドに向けられればインパクトは大きいと思います。

岡本 | 日本企業はインド進出には前向きでしょうか。

スインハ | 経済同友会とか、企業のトップは前向きです。しかし、ミドルの方はまだ慎重のようです。お腹壊すのは課長ですからね(笑)。しかし、何年か前には非常に慎重だったところが現



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

実に投資に踏み切るようなケースも出てきています。

岡本 | 今日は非常に幅広い、そして、興味深いお話をありがとうございました。